

の日柄でのバブル崩壊の開始であった。

日本の話はさておき、中国は安保騒ぎではなく天安門事件がそのエポックを画する学生デモであり、そこからの黄金律29・5年目である2018年11〜12月あたりから、尋常ではない景気後退が始まっている。

この日中両国のバブル破裂のタイミングは、偶然ではなく宇宙のルールを律する黄金律で決められているものだ。人為ではどうしようもないタイミングで、参加者13億人の史上最大規模のバブル破裂が起ころうとしている。だまされてはいけないのは業界人やメディアの希望的観測による中国経済底打ち論である。

黄金律的には建国1949年から69年目（2018年）に高値を見た相場（経済は）12年間低迷する。1949年から81年目の2030年まで本当の底打ちはないだろう。もつともそれまで共産党が持てばの話だが（次ページ図表1-1）。

CHAPTER 1

危機がいつに顕現する
中国

CHAPTER 5

文明史と黄金律からみた
パーフェクトストームの動き

P E R F E C T S T O R M

古来より相場は 黄金律で動いている

●経済現象の混沌は黄金律で法則化できる

ここまで、中国、米国、日本、欧州の状況を個別仔細に観察し、そのいずれもが同じタイミングで恐慌に向かっていくことを明らかにしてきた。これこそがパーフェクトストーリーである。その動きをもっと本質的に理解するために、本章では文明史を背景に相場を観察していく。

その文明史を背景に相場を観察していくためには、黄金律への理解が不可欠である。ここで論じるのは完全な帰納的アプローチである。帰納的アプローチとは、観察事実から最終結論を導き出すものであるが、その観察の仕方に黄金律という触媒を使うと、カオスでしかない相場現象、あるいは経済現象が、実は一定のルールのもとに動いていることが推論できるのである。

●黄金律における重要数字

黄金律の塊が正五角形（ペンタゴン）である。黄金律が宇宙を制するロジックだとすると、宇宙は正五角形だろう。

正五角形は1辺38・2単位でつくる。その正五角形の対角線の長さは61・8単位となる。その正五角形の内角の総和は540度である。540の除数である270、135も重要である。

後はペンタゴンを縦に置くと高さは59単位で台形部分の高さ36・5単位と三角形部分の高さ22・5単位を加えたものである（図表5-1）。

ペンタゴンを136ジ図表5-2のように2つ重ねたものも大事である。この場合はこのダブルペンタゴンの高さは59+36・5=95・5単位となる。

ここに出てきた数字で38・2、61・8、540、270、135、59、36・5、22・5、95・5、これに加えて100÷61・8=16.18あたりが重要な数字と思っていたきたい。

日々の相場の解析ではもつとはるかに多い数字を駆使しなければならないが、文明史の解析には不要であるのでここでは割愛する。ただ重要度においてどれがいちばん頻出する

黄金律でバブルと大恐慌を 法則化する

●チューリップマニアから20世紀の大恐慌までの動き

チューリップマニアによるバブル頂点は1637年である。19世紀の大恐慌のきっかけになった、鉄道バブルの頂点は1873年となっている。

そのインターバルは236年となっている。236年を黄金律で見ると2つのポイントで重要な日柄である。

一つは黄金律618にその補数である0・382を乗ずると236という数字が出てくる。まさに黄金律の精華のような数字である。

もう一つは、ペンタゴンの図(135^{ジグ}図表5-1)を参照いただきたい。ペンタゴンを立てると、底辺から先端までの距離が59単位となっている。その59を4倍すると236という数字が出てくる。つまり19世紀大恐慌とチューリップマニアにははっきりした黄金律に

CHAPTER 6

黄金律で予測する近未来の
具体的な相場の時期と水準

P E R F E C T S T O R M